

寺田寅彦全集

第八卷

寺田寅彦全集 第8巻 (全17巻)

1961年5月8日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第7刷発行

¥ 800

著 者 てら だ とら ひこ
 寺 田 寅 彦

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式 岩 波 書 店
 会社

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

随

筆

八

目次

軽井沢・	七
科学と文学・	一六
科学者とあたま・	五一
浅間山麓より・	五七
沓掛より・	六二
二科展院展急行瞥見記・	七五
KからQまで・	八一
さるかに合戦と桃太郎・	八七
人魂の一つの場合・	九二

伊香保・	九六
異質触媒作用・	一一〇
初冬の日記から・	一二〇
猫の穴掘り・	一三四
思い出草・	一四〇
踊る線条・	一四三
徒然草の鑑賞・	一四六
雑記帳より(Ⅰ)・	一五六
ある探偵事件・	一六〇
変わった話・	一六三
学位について・	一七五
ジャーナリズム雑感・	一八七

科学に志す人へ	二〇二
函館の大火について	二〇八
マーカス・ショーとレビュー式教育	二二二
庭の追憶	二三五
注解	二四一
後記	二五五

軽井沢

十五年ほど前の夏休みに松原湖へ遊びに行った帰りの汽車を軽井沢かるいざわでおり、ひと汽車だけの時間を利用してこの付近を歩いたことがあった。その時の記憶と今度行つて見た軽井沢とで、目についた相違はと言えば、機関車の動力が電気になっていること、停車場前に客待ちのリクシリクショウメンウメン*がいなくなつて、そのかわりに自動車とバスと、それからいろいろな名前のホテルの制帽を着た、丁寧でいばっている客引きの数の多いことぐらいである。山川の景色は百年ぐらいたつてもたいては年を取らないのである。

草津電鉄くまつでんてつで、駅と旧軽井沢との間に通称「白樺電車」しらばでんしゃ

というものを通わせている。いかにも軽井沢らしい象徴的な交通機関である。柱や手すりを白樺の丸太で作り、天井の周縁の軒ばからは、海水浴場のテントなどにあるようなびらびらした波形の布切れをたれたただけで、車上の客席は高原の野天の涼風が自由に吹き抜けられるようにできている。天井裏にはシナふうのちゅうちんがいくつもつるしてある。なんとなく子供のうれしがるようなぐあいになっている。そうして、子供を連れて乗ったおとなもつい子供のような気持ちになる、といったような奇態な電車である。柱の白樺の皮がはがれた所を同じ皮で繕つて、その上に巻いたテープには「白樺の皮をだいじにしてください」と書いてある。なるほど、だれでもちよつとはがしてみたくなるものと見える。この車を引っぱる電気機関車がまた実に簡単に愉快なものである、大きな踏み台か、小さな地藏堂のような格好をした鉄箱の中に機関手が収ま

っている。その箱の上に二本鉄棒を押し立てて、その頂上におもちの弓をつけたような格好のものである。それでもこれを通ると、途中の草原につながれて草をはんでいる馬が、びっくりしてびよんびよんはねるのである。

旧軽井沢の町はユニークな見ものである。ちょっと見ると維新以前の宿場のような感じのする矮小^{わいしょう}な低い家並みの店先には、いわゆる「居留地」向きの雑貨のほかにも、一九三三年の東京の銀座^{ぎんざ}にあると同じような新しいものもあるのである。書店の棚^{たな}にはギリシア語やヘブライ語の辞書までも見いだされる。聖書の講義もあればギャング小説もある。

郵便局の横町にナンキン町がある。店にいて往来人をじろじろながめる人たちの顔つき目つきがどこかはりちがう。なんとなくゲット^{ゲット}ー^{*}のような趣もある。周囲がみんななまけて金を使っている中でこの横町の

人たちだけは懸命で働いて金をもうけているのである。このへんで道をきくと「これをまっすぐに、まっすぐに……」と言われるにきまっているらしい。まっすぐに行かれるように道ができているのである。

ゴルフリンクの入り口でお茶を引いているキアデーの群れがしきりにクラブを振りまわしている。なんだか哀れである。昔とちがって今では貧民の子でも旧大名のお姫様のお供をして歩かれる。しかし日常生活の程度の相違は昔と同じか、むしろいっそう著しいであろう。子供らは得意になって殿様がたのような気持ちになってクラブをふるうているのである。リンクの入り口には「危険」だから入場するなというような意味の立て札がある。ちょっとしたアイロニーを感じさせる。垣根^{かきね}からのぞくと広々とした緑の海の上にぼつりぼつり白帆のように人影が見える。ゴルフをやらない人間から見ると、ゴルフをやっている人はみんな大貴

族か大金持ちのように思われる。垣根^{かきね}ただ一重の内側の緑野は、自分らとは生涯^{しょうがい}なんの因縁もない別の世界のような気がする。しかしもしかこれで、何かの回り合わせで、自分でゴルフをやり始めたら、また現在とはよほどちがった気持ちで、この緑の草原が見直されることであろう。

ゴルフ場からニューグランドへの、清流に沿うてゆるやかにうねり行く山腹の道路は、どこか日本ばなれのした景色である。樺^{かば}や栃^{とち}や厚朴^{はふのき}や板谷^{いたや}などの健やかな大木のこんもり茂った下道を、歩いている人影も自動車の往来もまれである。自転車に乗った御用聞きが西洋婦人をよけようとしてぬかるみにすべってころんだ。

至るところでうぐいすが鳴く。もしか、うぐいすの鳴き声のきらいな人があったら、一日もこのへんにはいられないであろう。しかしだれでもうぐいすの声を

楽しまない人はない。思うにわれわれの遠い祖先が山林の中をさまよい歩いて、生きるために天然とたたかっていたところから、人間はだんだんにうぐいすに教育されて来たものと思われる。うぐいすの鳴くころになると、山野は緑におおわれ、いろいろの木の実、草の実がみのり、肌^{はだ}を刺す寒い風も吹かなくなるということを教えられたに相違ない。うぐいすの声がきらいな人などありようはない。

星野温泉^{ほしののおんせん}の宿の池に毎朝水鶏^{くいな}が来て鳴く。こぶし大の石ころを一秒に三四ぐらいのテンポで続けざまにたたき合わせるような音である。それが、毎朝東の空がわずかに白みかけるころにはきまってたたきに来る。そっと起き出して窓からのぞいて見ても姿は見えない。ひとしきり鳴くと鳴きやみ、あたりがしんとする。しばらくすると今度は一町ぐらい下のほうの池で鳴いているらしい。この水鶏が鳴いてからしばらくするとほ

ととぎすが鳴いて通る。それがいつも同じ方向から鳴いて来て、また別のきまった方向へ鳴いて行くようである。それが通り過ぎてからしばらくすると、今度は宿の浴室のほうでだれかガーゲーゲーと途方もない野蛮な声を出して咽喉や舌のつけ根の掃除をする浴客がある。水鶏やほととぎすの鳴き声がいかに静寂であるのに引きかえて、この人間の咽喉をせんたくする音が、なぜこんなにも不快であるのか、これも不思議である。鳥にはだれも初めから遠慮とか作法とかを期待しない、というせいもあるであろう。また、鳥の生活に全然没交渉なわれわれは、鳥の声からしてわれわれの生活の中に無作法に侵入して来るような何物の連想をもしられないせいもあるであろう。蟬の声には慣らされるが、ラジオの饒舌にはなかなか教育されるのに骨が折れる。

夕方歩いていたら、湯川の沢の蘆原の中で水鶏が鳴

いていた。朝でなくても鳴くのである。ずっと離れた山すそにも、もう一羽別のが鳴いていた。沢のがだんだん近づいて行って、とうとう山すそのほうへ移って行くころには相手はもう鳴かなくなった。やがて水鶏の声はぱったり途絶えてしまって、十三夜ごろの月が雨を帯びた薄雲のすきまから、眠そうにこの静かな谷を照らしていた。水鶏の鳴くのはやはり伴侶を呼ぶのであろう。

このへんには猫がいない、と子供らが言う。なるほど、星野でも干が滝でも沓掛でも軽井沢でもまだ一匹も猫の姿を見ない。それが東京の宅の付近だと、一町も歩くうちにきっと一匹ぐらいは見つかるような気がする。日々に訪れて来るのら猫の数でも少くはない。なぜだろう。宿の人に聞いてみると、いないことはない。現に近くの発電所にも一匹はたしかにいますという。宿では食膳を荒らす恐れがあるから飼わないそうであ

る。宿で前に七面鳥を飼っていたが、無遠慮に客室へはいり込むのでよしたという。それにしても猫ねこの少ないだけは確かである。ねずみが少ないためかもしれない。そうだとするとねずみの食うものが少ないせいかもしれない。つまり定住した人口が希薄なせいかもしれない。冬になればこのへんはほとんど無人境になるそうであるから。

そう言えば、すずめもいっこうに見かけない。御代田みよしろへんまで行くとたくさんいるそうである。このすずめの分布は五穀の分布でたいは説明ができそうである。人間は金のある所へ寄るが鳥獣の分布はやはり「すぐに取って食える食物」の分布できまるものらしい。

星野に小さな水力発電所がある。六十五キロだそうである。これくらいのかわいいのだといわゆる機械的バーバリズムの面影はなくて、周囲の自然となれ合っ

て落ち着いている。狭い発電所の構内には、おいらん草が真紅に美しく咲き乱れている。発電所から流れ出す水流の静かさを見て子供らが不審がる。水はそのありたけの勢力を機械に搾取されて、すっかりくたびれ果てて、よろよろと出て来るのである。しかし水は労働争議などという言葉は夢にも知らない。

人間は自然を征服し自然を駆使していると思っている。しかし自然があばれたすと手がつけられないことを忘れがちである。全国至るところにある発電所の堰えんのどれかが、たとえば大地震のためにこわれたら、その時には人間の弱さがはつきりわかるであろう。気の狂った動物園の象ぐらいの事ではすまない。

道ばたの白樺しらばの樹皮を少しはがしてよく見ると、実に幾層にも幾層にも念入りにいろいろの層が重疊している。これにも何か深い「意味」があるであろうが、この薄層の一枚一枚にしるされた自然の暗号記録はわ

れわれには容易に読めない。まただれも読もうともしないようである。

人間はなんと言つてもやはりいちばん人間に興味があるようである。軽井沢の町や新軽井沢の林間を歩いて行き会う都人士は、みんななんとなく新軽井沢らしい顔と服装とをしている。若い女どうしは近よりながら、互いに用心深くお互いを偵察し合いながら行き違ふ。そうして何かしら小さな観察をし小さな発見をすることによってめいめいの小さなかわいいプライドを満足させているように思われる。

雲取池の^{くもとりいけ}みぎわのベンチに、五十格好の婦人が腰かけて、ハンケチで半面をおおったまま、いつまでもじっとして池の面をながめていた。相当な服装をしているが、いかにもやせ衰えている上に、顔一面に何か皮膚病と見えてかびでもはえたような^{はだあひ}肌合をしている。このへんを歩いている人たちの大部分は、西洋人でも

日本人でも、男でも女でも、みんなたった今そこで生命の泉を飲んで来たような明るい活気のある顔をしている中で、この老婦人だけがあたかも黄泉の国からの孤客のように見えるのであった。「どうかするんじゃないかしら。」そんな暗い予感の言葉が同時に一行の口から出た。草津入浴のついでにこのへんを見物に来たのだろうというものもあった。しかし、当人は存外のんきに歌でも詠んでいたのかも、それはわからない。顔の粉っぽいのは白粉のつけそこねであったかも、それはわからない。

軽井沢の駅へおりた下り列車の乗客が、もうおおかたみんな改札口を出てしまったところに、不思議な格好をした四十前後の女が一人とぼとぼと階段をおりて来た。駅員の一人がバスケットをさげてあとからついて来る。よれよれに寝くたれた、しかも不つりあいに派手な浴衣を、だらしなく前上がりに着て、後ろへはほ

どけかかった帯の端をだらりとたらしめている。頭髮もすずめの巢のように乱れているが、顔には年に似合わない厚化粧をしている。何かの病気で歩行が困難らしい。妙な足取りでよちよち歩いて来るそばを、駅員がその女の持ち物らしいバスケットをさげてすましてついて来た。改札口を出るとその駅員は、草津電鉄のほうを指さして何か教えているらしかった。女が行ってしまった。その駅員は、改札係と、居合わせた警官と三人で顔を見合わせて何か一言二言言ってにやにや笑っていた。

同じ汽車でおりた西洋人夫婦が、純粹な昔のシナの服装をしたシナ婦人に赤ん坊を抱かせて、しずしずと改札口を出た。子供のかかえ方が日本人とはよほどちがっている。それが実にさもさもだいなものを捧持ほうじしているようなかかえ方である。よそ目にもはらはらするようなそこらの日本の子守りこもりと比べて、このシナ

婦人のほうに信用のあるのはもっともである。

軽井沢から沓掛くかけへ乗った一人の労働者が、ひどく泥酔泥酔して足元があぶないのに、客車の入り口の所に立ってわめいている。満州国まんしゅうこくがどうして日本帝国がどうかしたといったような事を言って相手を捜している。客車の中から一人洋服を着た若い学校の先生らしいのが出て来て、手を握ったり肩をたたいたりしてなだめている。労働者は喜んで何か口の中でもぐもぐ言いながらその若者を拝むようなまねをした。ちよっとした芝居であった。その車の入り口のいちばん端にいた浴衣ゆかたがけの若者が、知らん顔をしてはいたが、片腕でしっかり壁板を突っぱって酔漢がころげ落ちないように垣かきを作っていた。新青年と旧青年との対照を意外なところで見せられる気がした。

雨気を帯びた南風が吹いて、浅間あさまの斜面を白雲が幾条ものひもになってはい上がる。それが山腹から噴煙

でもしているように見える。峰^{みね}の茶屋^{ちやや}のある峠^{とうげ}の上空に近く、巨口を開いた雨竜^{あまりゆう}のような形をしたひと流れのちぎれ雲が、のた打ちながらいつまでも同じ所を離れない。ここで気流が戦^{たたか}って渦^{うず}を巻いているのである。

日によつてはまた、浅間の頂からちょうど牡丹^{ぼたん}の花弁のような雲の花冠が咲き出ていることもある。それからまた、晴れた日に頂上^{とうじやう}が全く見えないことがあるかと思うと、雨の降るのに頂上まであり見えることもある。この天然の大仕掛けの氣象観測機械を利用することを知らない科学はまだ幼稚なものである。

グリーンホテルからの眺望^{ちやうぼう}には独特なものがある。常緑樹林におおわれた、なだらかなすそ野の果ての遠いかなたの田野の向こうには、さし身を並べたような山列が斜め向きに並び、その左手の山の背には、のこぎりの歯というよりは乱杭^{らんぐいば}歯のような凹凸^{おうとつ}が見える。

妙義^{みょうぎ}の山つづきであろう。この山系とは独立して右のかたはるかにそびえている雄大な山塊は八^{やつ}が岳^{たけ}であろう。ここから見て初めて八が岳の大きさ高さが納得できるような気がした。

ホテルの付近の山中で落葉松^{からまつ}や白樺^{しらば}の樹幹がおびただしく無残にへし折れている。あらしのせいかと思つて聞いてみると、ことしの春の雪に折れたのだそうである。降雨のあとに湿っぽい雪がたくさん降つて、それが樹冠にへばりついてその重量でへし折られたそうである。こういう雪の山路に行き暮れて満山の雪折れの音を聞くということは、想像するだけでも寒いようである。

ホテルの三階のヴェランダで見ていると、庭前の噴水が高くなり低くなり、細かく砕けたりまた棒立ちになつたりする。その頂点に向かう視線が山頂への視線を越しそうで越さない。風が来ると噴水が乱れ、白樺